

公開シンポジウム

公開シンポジウム

2021年8月28日(土) 10:00-12:00

学生の皆さん、コロナが収束したら 海外フィールドワークに飛び出そう！ ボルネオ島、極東ロシア、中央アジア編

本や映像でしか見たことがない世界各地の壮大な自然。そこには生態がよく分かっていない野生動物が数多く生息しています。しかし、生息地は開発によって失われつつあり、その開発に日本が関わっている場合も少なくありません。海外で野生動物の生態を研究すること、研究成果を一般の人々に発信することは、野生動物とそれを取り巻く環境の保全・国際貢献にもつながります。

地球規模での環境問題に関心が高まる中、学生の皆さんの目は海外の野生動物にも向きはじめています。しかし、具体的にどのような研究が行われているのか、どうすれば関わることができるのか、ボンヤリとしか見えないのが現状かもしれません。まずは、どこでどんな研究をしているのか、経験者の話を聞いてイメージを膨らませることから始めませんか。

そこで本大会の公開シンポジウムでは、海外フィールドワークの3つの事例を紹介します。まずは東南アジア・ボルネオ島の熱帯雨林や極東ロシアの大森林を舞台とした研究保全活動。さらに中央アジアの山岳地帯と国内動物園で研究・保全活動に関する話題を提供していただきます。研究はもちろん、現地の人たちとの関わりやエピソードなど、海外フィールドワークの魅力も紹介。学生の皆さんが、自ら初めの一步を踏み出すキッカケになればいいなと思います。

ファシリテーター：米澤隆弘、和久大介

【スケジュール】

- 10:00-10:05 趣旨説明
- 10:05-10:40 「2019年一斉結実期のオランウータンの塩場利用」 松林尚志
- 10:40-11:15 「ロシア沿海州の森にクマを追う」 山崎晃司
- 11:15-11:50 「野生動物と動物園動物をつなぐ研究、と保全活動～ユキヒョウを例に～」
木下こづえ
- 11:50-12:00 質疑応答

2019 年一斉結実期のオランウータンの塩場利用

松林尚志 1、荒山 悠 1、Peter Lagan²、結城悦子 3、福田幸広 3

(1 東京農大・野生動物、2 マレーシア・サバ州森林局、3 TOPOUTIMAGES)

動物にとって塩は必要不可欠。しかし植物にとってはむしろ害になるため、植物体にはほとんど含まれていません。そのため植物を食べる動物は、積極的にエサ植物以外から塩を取る必要があります。

これまで私たちはマレーシアのボルネオ島において、ミネラル類の供給源の一つとして、塩場（しおば；塩舐め場）と呼ばれる場所に着目し、研究を行ってきました。そして、塩場がオランウータンはじめ様々な哺乳類に利用されること、ミネラル摂取という生存にとっての重要性に加えて、出会いの場という繁殖にとっても重要な場所であることを示しました。さらに自動撮影カメラだけでなく、環境 DNA によっても利用種を把握できることも明らかにしました。また、野生動物を考慮した熱帯商業林管理において、塩場を重点保護区とする提言が採用され、基礎研究が保全に貢献できることも示しました。

東南アジア熱帯雨林では一斉開花・一斉結実という固有の現象が知られています。2019 年、一斉開花・結実が確認されたため、私たちはオランウータンの塩場利用を集中的に調べました。その結果、非一斉結実期とは大きく異なる結果が得られ、一斉結実はオランウータンの行動に大きく影響を与え、塩場の重要性がより強まることが示唆されました。本シンポジウムでは、2019 年のフィールドワークを中心に紹介します。

公開シンポジウム

ロシア沿海州の森にクマを追う

山崎晃司 1、泉山茂之 2、釣賀一二三 3、小池伸介 4、後藤優介 5
(1 東京農大、2 信州大、3 道総研、4 東京農工大、5 茨城県博)

北海道の利尻島から西に少し視線をずらすと、ロシア沿海州の大地に行き当たります。シホテアリン山脈が連なり、モンゴリナラやゴヨウマツの深い森が広がります。同地には、ツキノワグマとヒグマに加え、トラ、オオカミ、リンクス、カワウソなどの食肉類、偶蹄類ではヘラジカ、アカシカ、ニホンジカ、ノロジカ、ジャコウジカなどの多様な動物が同所的に生活します。日本の最終氷期の頃の動物相も同様だったことを考えるとわくわくする場所です。

2015 年から、ロシア科学院、シホテアリン管理事務所、Wildlife Conservation Society との協働で、ツキノワグマとヒグマの種間関係に関する研究に着手しました。これまでに、両種を捕獲して GPS 首輪を装着してきました。首輪には、近接センサーが組み込まれています。GPS による位置測位で両種が 200m 以内に接近した場合、それぞれのクマの軌跡の測位を分単位で行えます。また、近年は気候の温暖化の影響で、台風の進路が変わり日本を通り抜けた台風が沿海州を度々直撃しています。そのため、沿海州の豊かな森は大規模面積での風倒木の発生や土石流などによって大きく改変されています。このような森林の損失に対し、2 種類のクマがどのように応答しているかも研究のテーマです。

ただし、ロシアでの調査は計画通りにはほぼ進みません。森の深さや機材の物流の困難さに加え、研究に必要な許認可取得に気の遠くなるような時間と忍耐も必要です。それを楽しむ心の余裕が求められます。

野生動物と動物園動物をつなぐ研究、と保全活動
～ユキヒョウを例に～

木下こづえ

(京都大学野生動物研究センター)

世界で最も高いところに生息するネコ科動物、ユキヒョウ。中央アジアの高山生態系の最高次捕食者として生態系維持の重要な役割を担っています。しかし、人が足を踏み入れるのも困難な高山に生息しているため、「ゴースト・アニマル」ともいわれ、直接その姿を見た者は少ないのが現状です。

ユキヒョウは高山の厳しい環境の中で単独で暮らしており、広大な行動圏をもっています。そのような環境下で、どうやって雄と雌は出会っているのだろうか？そんな疑問を抱きながら、私の研究生活は、動物園個体を日々詳細に観察し、糞を分析して彼らの生理状態（ストレスや発情など）を調べることからはじまりました。糞は、直接観察が困難な野生ユキヒョウでも、採取することが可能です。動物園での詳細な観察・糞分析の研究成果を生かして、糞から野生ユキヒョウの生理状態を分析する研究に着手しました。

ユキヒョウは中央アジアの12か国にまたがって生息しており、そこに暮らす人々は多様な文化をもっています。ユキヒョウは絶滅に瀕する種とされていますが、家畜を襲撃することで報復殺の対象となり、多くの個体が人の手によって命を落としています。生息地での研究を進める中で、現地の人々に協力できる活動はないか？研究活動を通して、保全活動にも目を向けるようになりました。本シンポジウムでは、動物園と野生をつなぐ研究活動に加えて、生息地での保全活動についても紹介したいと考えています。